黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.96 (March 31, 2024)

第 96 号　2024 年 3 月 31 日

例会発表要旨

10月例会　2023年10月28日　オンライン開催（Zoom）

① Afrofuturism in “Bloodchild”: Destroying Hierarchies

Yuto Nakagawa (富山大学・院)

This presentation investigated Afrofuturistic viewpoints in Octavia E. Butler’s “Bloodchild.” I focused on how it destroys old-fashioned hierarchies, such as Whites are higher than Non-Whites, men are higher than women.

First, I showed the relationship between humans and Tlic, the worm-like aliens dominating humans on the Tlic planet. Considering worms are often seen lower than humans on Earth, the situation is opposite. Humans are also forced to host Tlic larvae in their bodies for this hierarchy. As they are the “races,” their relationship is analogous to that of Whites and Non-Whites. Humans represent Whites, while Tlic Non-Whites. Reflecting the past hierarchy, this relationship might realize racial equality. However, I doubted the “equality” to just place Tlic higher than humans. I mentioned animals called “achti.” Tlic is poor at animals like achti because their eggs were previously killed by animals. Tlic put their eggs even in achti, when they require humans’ help. Their relationship can be balanced by considering Tlic are stronger than humans, humans are stronger than animals, animals are stronger than Tlic. This brings an idea of racial equality.

Second, “Bloodchild” is the story of “male pregnancy.” “Bloodchild” describes men carrying Tlic larvae: the very situation of “pregnancy.” Although women also carry them, they must bear their own children, so men are more chosen. Pregnancy is a tremendous burden on women that men cannot experience. Butler made her male

readers feel this burden by making her male characters pregnant. Moreover, I argued that men feel emotions of women. The man named Lomas “gives birth to” Tlic larvae, but their mother dies, and her sister accepts them. She could not bear a baby due to the Tlic rule, but thanks to Lomas, results in having them. This sister represents sterile women. When sterile women want children, they would ask others to bear babies, and later appreciate their surrogacy. Men feel suffering, gratitude, pleasure about having babies, all of which only women can share, through Lomas. Butler’s male readers and characters are made to feel physical pain and emotions about pregnancy, which realizes sexual equality.

② トーク "Japan Afro-American Friendship Association: The Past, Present, and Future"

Melvin Washington（日本アフロアメリカン友好協会　エグゼクティブ・ディレクター）
Darryl Wharton（Assistant Professor, Temple University Japan）
司会：平沼公子

2023 年 10 月例会では、Melvin Washington 氏（Japan Afro-American Friendship Association エグゼクティブ・ディレクター）と、Darryl Wharton 氏（テンプル大学）にご登壇いただき、Japan Afro-American Friendship Association（JAFA）の歴史と現在、今後の展望についてお話いただいた。JAFA は 1981 年に活動を開始した、その名の通りアフリカ系アメリカ人コミュニティと日本人の間の文化交流を図る団体である。Washington 氏は 1976 年に AIESEC(アイセック、国際経済商学学生協会)を通して来日したことをきっかけに、日本人のアフリカ系アメリカ文化への興味・関心に気がつき、日本在住の同郷者とともに文化交流の場を立ち上げた。Washington 氏の帰国や立ち上げメンバーの高齢化などから一時は活動を停止していた JAFA だが、今年度に入り活動を再開している。日本在住および日本に関わりの深いアフリカ系の人材育成と、文化交流のための団体である JAFA は、黒人研究学会と活動内容や目的といった点において親和性が高く、質疑応答では今後様々な形でのコラボレーションのあり方が示唆されるなど、発展性のあるトークとなった。

1月例会　２０２４年１月２０日　オンライン開催（Zoom）

① 歪んだシステムを打ち破れ！—劇作家 Suzan-Lori Parks の Movement

穴田理枝（大阪大学非常勤講師）

1980 年代後半に劇作家としてデビューした Suzan-Lori Parks は、近年アメリカ社会へのメッセージを直接届けようとする演劇へとそのスタイルを変えてきており、本発表で論じた 2019 年初演の White Noise は BLM 運動の流れを受けながら、分断されるアメリカの諸相を切り取る作品である。

30 台前半、現代の都市部で生きる 4 人の大学の同窓生、その 1 人である黒人の Leo は警官から理不尽な暴力を受け、その結果、自分を守るために白人である Ralph の奴隷となることを決める。これをきっかけに、4 人はそれぞれにこの矛盾に満ちた世界への怒りを吐露する。「なぜ黒人であるだけで命の危機にさらされるのか」という Leo の怒りは歴史的に黒人が抱き続けてきた思いである。一方、現状に不満を持つ Ralph の怒りは、白人至上主義に接続されていく。人権派弁護士である白人 Dawn は約束を反故にしてきた社会への怒りをぶつける。黒人の Misha が問うのは、脚を引き合い、ネガティブなレッテルをはがすこともできない黒人の主張の弱さ、白人に対する卑屈な態度など、黒人自らの姿勢なのである。

そもそも人種問題は、あらゆる問題と複雑に絡み合っており、黒人への過剰な暴力を可能にしてきたものとは、資本主義的価値観が人種差別と結びついて形作られた、社会システムそのものだといえよう。人々の、「覚醒」こそがその枠組みを変えていく流れを造り出すことになるが、「ホワイト・ノイズ」とは、そのような社会への異議申し立てを黙らせるために、システムを擁護する側が発信する、「シー…」というノイズである。このノイズを切り裂き、変革を求める声をあげることが「覚醒」した者の果たすべき役割なのだ。

本作品に見られるように、登場人物それぞれに今、ここで向き合うべき問題を語らせることにより、アメリカ社会へ向けたメッセージを自ら発信し続ける姿勢は、正に演劇を通じた Parks 流の Movement だといえるのではないだろうか。

② 寄る辺ない者たちの連帯――『キンドレッド』と『闇の左手』との絆を中心に

柳楽有里 （兵庫県立大学）

オクテイヴィア・E・バトラーの『キンドレッド』（1979）は、黒人女性デイナ・フランクリンのタイムスリップを描いた小説である。1976 年のアメリカに住むデイナは、南北戦争以前の南部へのタイムスリップを繰り返し、結末では左腕を失う。先行研究では、バトラー作品における身体の重要性がしばしば議論されてきた。しかし、本作品でデイナが喪失する腕がなぜ左腕なのかは、十分に解明されていない。本発表では、男性が主流であった 1970 年代の SF 作家たちの中で、数少ない女性作家として頭角を表していたアーシュラ・K・ル＝グウィンの代表作である『闇の左手』（1969）と、マイノリティである黒人作家の中でほとんど唯一成功した黒人女性作家であったバトラーの『キンドレッド』との関連性を検証した。

バトラーが『キンドレッド』において描き出したのは、血縁関係にとらわれない、お互いに孤独な者たちのあいだの「同族」関係という、相互依存の関係にあるもの同士のつながりである。この「同族」的絆というテーマを、バトラーはル＝グウィンから受け継いだといえる。また、『キンドレッド』のデイナが左腕を失うのはバトラーがル＝グウィンの代表作『闇の左手』を意識していたと考えられる。『闇の左手』において、ゲセレンが左腕をつかまれ、雪の「壁」に飛びこんで左腕を失うという展開は、『キンドレッド』のクライマックスと驚くほどよく似ている。

『闇の左手』からの影響を考慮に入れると、デイナの左腕の喪失は、過去の苦々しい経験を示すのと同時に、左腕の喪失が明るい未来への希望を残すための喪失でもある可能性を読みとることができる。『キンドレッド』は、バトラーのいう同族的な絆で結ばれた寄る辺ない者たちが、相補関係の上に成り立つ調和のとれた明るい未来へ向かうことを示している点を指摘した。

③ 『オセロー』と『デズデモーナ』――デズデモーナの愛

福島　昇（日本大学）

2011 年、モリスンは『デズデモーナ』を死後の世界に設定し、『オセロー』の斬新な解釈を試みた。オセロー、デズデモーナ、イアーゴーを三角関係の視点から捉え直し、オセローはデズデモーナのことを考えるのを止め、オセローとイアーゴーは兄弟愛で結ばれていると解釈し、オセローのヒロイズムを否定する。しかし、モリスンの描くデズデモーナはオセローとイアーゴーのおぞましい行為を許すことはできないが、オセローへの愛――「いいえ、許せません。しかし、あなたを愛し、あなたに献身し続けることはできます」――はシェイクスピアのデズデモーナと同じく永遠に変わらない。モリスンはデズデモーナの心の内をフェミニズムの視点から、シェイクスピアのデズデモーナよりも、より深く具体的に描いている。デズデモーナ――最も聡明で、霊感をうけたような創造物――はオセローと共にあらゆる社会的な規範に挑戦し、新しい世界を作ろうとする。アフリカの伝統では、死者は人々の心の中で生き続け、存在感があり、モリスンが言うように女性にとって過去と未来は同じである。現在を照らし、希望を満たす時を超えた時間の中で、Des-demon-a はその名が意味する「悪魔」“demon”と対峙し、「高潔な」“mona”生き方をめざし、過去と現在を和解させ、もはや一人ではない未来に対して準備をする。

ジョー・エルドリッジ・カーニーはモリスンの戯曲『デズデモーナ』は『オセロー』の死後の世界を描いた翻案であり、フェミニズムと人種の視点から、当時の不公正さを非難したものであると主張している。モリスンは従来のシェイクスピアの『オセロー』解釈は退屈だったと言ったことがあるが、モリスンはその議論を踏まえ時空を超えたミュージカル、言わば『オセロー』の続編を創作したのである。

会員からの投稿

在留アフリカ人研究としてのガーナ人のペンテコステ教会

山田　平　(明治学院大学修士課程 1 年)

私は昨年 10 月から現在埼玉県川口市にあるガーナ人によって組織、運営されているペンテコステ教会に赴き、調査を行なっている。そこで得たものを最終的には修士論文として執筆したいと考えているが、本稿では私がなぜガーナ人の教会を調査するに至ったか、そして実際の様子について簡単にご紹介できればと思う。

はじめに、日本に暮らす外国籍人口は現在約 300 万人と言われ、その数は年々増加している。特に 80,90 年代の増加は顕著であり、アジア地域や南米地域から移民が急増したことで彼らは「ニューカマー移民」と呼ばれた。そのため Google Scholar などで「ニューカマー移民」と検索するとそのほとんどが上記の地域出身者を扱った研究である。しかし、アフリカ地域出身者もそのほとんどが「ニューカマー移民」として日本に渡ってきたものの、規模の少なさからか、さほど研究の対象となることが少ない。事実、出入国在留管理庁のデータを基に 2022 年時点で日本に居住する外国人の出身地域別の割合を見ると、総数約 300 万人に対し、アフリカ地域出身者はその内の約 0.6%に当たるわずか約 2 万人程度である。

数少ない先行研究は主に、彼らの世界を股に掛ける移動性を軸とした経済活動を中心としたものが多いが、彼らの日本での生活を円滑にするためのコミュニティの存在は言及されるが、実態調査はほとんど行われていない。そこで著者はいくつか在留アフリカ人が創出するコミュニティを検討した結果、ガーナ人が運営するペンテコステ教会に辿り着いた。在留アフリカ人の中でもナイジェリア人に次いで 2 番目の人口規模を誇るガーナ人であるが、特定の集住地区などを持たず散住している傾向のある彼らにとって、検討しうる中で最も規模の大きいコミュニティであることや、30 年近い歴史を持つこと、また教会の本部がガーナにあることで本部の後ろ盾を考えれば組織として強固なのではないかと考えたことが理由である。

次に様子について述べる。教会は埼玉県川口市芝の簡素な住宅街に位置している。一見アパートに見える建物だがこれこそが在留ガーナ人が集うペンテコステ教会である。組織としてはまず 1995 年にザ・チャーチ・オブ・ペンテコステ・ジャパン(以下 COPJP)が組織されている。当初は信者と牧師を含めたわずか数名で場所を借りながら活動を行なっていたが、2002 年からこの埼玉県川口市の物件を当時日本に暮らしていたガーナ人の融資や募金によって購入した。以降はこの川口の教会を本部とし、支部となる教会が東京、千葉、愛知、大阪に計 6 つ存在する。教会組織内には役職に応じた階級が存在し、上から順に使徒、牧師、司祭、助祭となる。しかし使徒はガーナ本部を主な駐在地としているため、COPJP では 1 人の牧師、及びその他複数の司祭、助際が各教会を運営し、維持している。

川口の教会では、毎週日曜日に 10 時から 13 時まで行われる日曜礼拝があり、平均して 30 人ほどの人々が訪れる。その内のほとんどがガーナ人であるが、若干名のナイジェリア人や日本人も参加している。教会で主に使用される言語は英語であるが、英語を介さない日本人の参加者がいる場合には、日本で生まれ育った 2 世が説教をする牧師や司祭の横で翻訳を行うなど臨機応変な対応も見せている。

礼拝の執り行われ方は、他のプロテスタント宗派と比較しても特徴的であり、キリスト教とガーナ土着の伝統宗教との融合が垣間見える。教会で助祭を務める男性が「私たちは礼拝の時踊るのが好きだから」と語るように、踊りに関しては参加者の大半が積極的である。ガーナのポピュラー音楽「ハイライフ」調の讃美歌をバンド演奏と生歌に合わせて参加者が小一時間ほど踊り続けることが毎週の礼拝の光景である。また曲の中には、ガーナのアシャンティ人に伝わる神様「オニャンコポン」について言及されるものもある。

表向きには信仰のための教会としながらも、普段は首都圏を中心に散住していることから、ガーナ人が集う場として教会へ参加する人も多くおり、ある参加者はこの空間に参加することで「安心する」と答えていた。このようなことから教会におけるインフォーマルな役割として、同郷の集団が集うエスニックなコミュニティと指摘することができる。エスニック・コミュニティとして教会は、葬式や結婚式、命名式、食事会など行うなどその活動の幅は多岐に渡っており、日本に居住するガーナ人の生活を豊かにする働きを担っている。

残念ながら本稿に収めることのできない教会の特徴や魅力などまだまだたくさんあるが、総じて言えるのは教会に荘厳な雰囲気はなく、皆思い思いに教会での時間を過ごしていることである。終始参加者は楽しそうに礼拝に行い、礼拝後はその場に止まって談笑している姿などよく見られる。ほとんどがガーナ人で構成されているため、世間的な認知度は皆無かもしれないが、教会は多くのガーナ人にとって欠かせない場のように見受けられる。

※教会の詳細についてはホームページと各種 SNS がございます。興味のある方はこちらからご覧ください。

・ホームページ

URL： The Church Of Pentecost - Japan - The Church Of Pentecost (copjapan.org)

・インスタグラム
@_cop_japan

・フェイスブック
Thecopjapan Copj

『特別企画 70 周年語り継ぎプロジェクト』

2024 年に当学会が発足から 70 年を迎えるにあたり、過去の空気感や人の感触が伝わってくるような会員の方々の思い出話を、前回の会報から、数人ずつ掲載することにいたしております。なお、掲載順は五十音順としております。

1980 年代初期の黒人研究の会

北島義信

私が黒人研究の会に入会させていただいたのは、大分県別府市で開催された 1979 年の創立 25 周年第 25 回総会・研究発表会（6 月 23 日・24 日）であった。当時短期大学の英語教員をして私は、たまたま教材用の見本テキスト『夜の彷徨』（アレックス・ラ・グーマ）を読み、感動したのがアフリカ文学研究の始まりであった。テキスト出版社の門土社社長・關功氏は、アフリカ文学に対する私の熱意に応えて、古川博巳先生と小林新次郎先生にご連絡いただき、わざわざ一緒にご自宅を訪問する労を取られた。古川先生は当時すでに、チュヌア・アチェベの『崩れ行く絆』を門土社から出版されており、小林先生は南雲堂から訳書『アフリカ文学の世界』を出版されていた。

お二人は初対面の私を快く受け入れて下さり、貴重な数冊の書籍を即座に貸与された。1950 年代後期の黒人研究の会では研究領域にアフリカが含みこまれ、1962 年の『黒人研究』18 号には文学を含めた特集が組まれているのを知り、その慧眼に驚かざるを得なかった。1979 年の 25 回総会・研究大会では、「世界文学としての現代アフリカ文学」という論題の発表をさせていただいた。総会終了ののち、小林先生の運転で、「サファリパーク」に行き、ケニヤのダンスを見学し、その後、生まれて初めて飛行機に乗って大阪へ帰った。

総会はとても楽しく、お会いした方々は、すべて人間味あふれる研究者であった。その魅力が忘れられず、以後、ほぼ休まず、月例研究会に出席することとなった。黒人研究の会は、当時、ひどい環境の職場にいた私には、唯一の豊かな「オアシス」であった。

月例会では、アメリカの黒人文学の報告が多かったが、それによって貴重な「耳学問」が得られ、また、アフリカ文学の研究発表ができる貴重な場であった。研究会後、六甲道近くの中華料理店に行き、皆で会食し、自由に研究や社会について論じあえたのはとても楽しいことであった。ある時、ロレイン・ハンズベリーの話が出た。そのとき、赤松光雄先生から、「アフリカ人を描いた戯曲『白人』をどう思われますか？」と尋ねられた。早速、この作品をお借りし、一気に読破した。アメリカ黒人がアフリカ人を描く場合と、アフリカ人がアフリカ人を描く場合とでは、微妙なズレがある。そのズレに、肯定的な意味がある場合と、否定的な意味がある場合があることを知った。赤松先生は、台湾の黒人文学研究者・李有成先生も絶賛されるほども中国語が堪能で、中国では中国語で黒人文学を講義されている。なぜ、中国語を学ばれたのか理由をお尋ねすると、「学生時代にフランス語の単位を落としたからですよ」と申された。

1980 年代はウォーレ・ショインカがノーベル文学賞を受賞するなど、アフリカ文学が大きく発展した時代であり、黒人研究の会は、グギ（1981 年）、マジシ・クネーネ（1983 年）、センベーヌ・ウスマン（1984 年）を迎え、交流を深めた。黒人研究の会の特徴は、研究と社会的・人間的視点の結合にある。今は亡き、草創期の研究者たちの、他者を思いやる優しさ、社会性に裏打ちされた研究の迫力は、継承すべき遺産であるといえよう。

「黒人研究の会」と私

楠瀬佳子

今から 60 年ほども前のことだが、鮮明に覚えていることがある。神戸市外国語大学英米学科 1 年の時のこと。ケネディ大統領狙撃の瞬間を学生食堂のテレビで、それも日本初の衛星放送で観たことだ。すごくショックを受けた。その翌年春には、「黒人研究の会」10 周年の記念集会が御影公会堂で開催される旨の案内文を大学構内で見た。プログラムの中で、お名前だけを聞き及んでいた岩城玲子さんが黒人の詩を朗読されるとのことで、わずか 1 年の先輩なのに、なぜかすごく年上の大先輩という錯覚と、ある種の憧れを抱いたことが思い出される。おそらく、ラングストン・ヒューズなどの詩を取り上げられたものと記憶している。

1 年時必修の赤松光雄先生の講読で、アメリカ黒人の歴史や文化の一端について学んだ。3年時の貫名美隆先生の講読では、ホイットマンの『草の葉』(Leaves of Grass)を原書で学んだことなどが思い出される。また、いつの年か、選択科目であったが、同先生担当の「エスペラント語」の教室にも出た。貫名先生が、アメリカ黒人のことを教室で語られることは、ほとんどなかったと思う。しかし、親しい学生仲間数人との自主的な読書会があり、アメリカ黒人の歴史について学ぶことがあった。そのきっかけは、先にも述べた大統領狙撃事件、そして「黒人研究の会」というユニークな名称の研究会の存在があったことはほぼ間違いない。

実際に「黒人研究の会」に私が参加するようになったのは、卒業以後のことだった。60 年代から 70 年代にかけて、その頃は、社会人も学生も歓迎してくれるような広く開かれた会だった。当時の中心は、大学に籍を置かれるような何人かの研究者の先生方の他に、たとえば国鉄職員の梅村成浩さん、女子高の先生であった和田フミ子さん、大手企業勤務の内海世喜子さんなど、主として貫名先生の薫陶を受けられた方々が月例会や会誌発行など事務的なことがらの中心に居られた。

思い出されるのは、若狭湾に臨む丹後の伊根での民宿を利用して、「黒人研究の会」の夏合宿をしたことだ。会の重鎮のお一人とも言うべき赤松先生のほか、後に黒人文学の権威となられ、ラングストン・ヒューズなどとも手紙で親交を結ばれた古川博巳先生のほかにも、タクシー会社経営の河野さん、中学教師の前田征子さんなど、多種多様な職場の方々が寝食を共にしたのだった。梅村さんなどは、アメリカで出ている新聞記事からホットなニュースを紹介されるなど、情報を自分自身で選択し、解釈することを大切にしておられたように思う。

私自身は卒業後、神戸にあった外資系の銀行に勤めていたが、その後に縁あって、母校の大学院に戻ることになった。当時は、全国的、いや世界的にも学生運動や労働運動がいやがうえにも活発な頃だった。私は、会の事務局のお手伝いをするようになっていたが、その事務局は大学内から貫名先生のご自宅に移っている時期もあった。当時、私は長田区に住んでおり、長期にわたって会誌を作って貰っていた木下印刷もまた長田区にあった。そんなことで、梅村さん、内海さん、和田さんたちと、その印刷屋さんに駆けつけて校正の仕事をすることがよくあった。手作りの「会報」を作るのは、実に楽しい仕事だったし、日本で最初の記事や情報を発信しているのだとの自負もあって、とてつもない喜びを味わっていたと言っても、過言ではなさそうである。また、個人的には、貫名先生の大きなお仕事の一つ、W・Z・フォスターの訳書『黒人の歴史—アメリカ史のなかのニグロ人民』(大月書店、1970)の索引づくりのお手伝いをさせていただいた。そんな貴重な経験が刺激となって、私自身が後に研究者の道に進む動機になったように思う。

残念なことに、以上の拙文でお名前を挙げた方々の全員が、今はこの世に居られない。し

かし、この人たちが居られなければ、大学などを含めて、あの世情騒然とした 60 年代から 70 年代への大混乱の中で、多くの（大小の）研究会が消えてなくなったように、「黒人研究の会」も、もしかしたら霧散してしまっていたのではないかとさえ思う。当時は、研究者中心の「学会」というよりも、市井の社会人までが集まって、それぞれの実生活、社会経験、そして未来への抱負を大切にしながら、黒人問題との対峙を通して、自分たちの日常を問うという姿勢が誰にも共通していたように思う。あのような時期に「黒人研究の会」というユニークな、そして小さな会が存続しえた秘密は、そのあたりにあったように思う。

「シアトルにて――風呂本先生へのレスポンス」

古川　哲史（大谷大学）

『会報』前号から始まった「語り継ぎプロジェクト」素晴らしいですね。印刷して読みました。そして、風呂本惇子先生へ長い感想文をメールしたら、「哲史サイドの回想録を興味深く拝読」とお返事がありました。わたし自身はまだ還暦にも達していないですし、学部は哲学でしたが、その後は歴史学で来たので、一歴史学徒として記憶あるうちに、風呂本先生の「語り」に応答する形でその内容を会報用に書き直して記しておきます。（別の会員から、共有して頂きたいとのお話もありましたので。）

風呂本先生のお話は 1992 年 11 月のことですので、もう 30 年以上前の出来事です。わたしはまだ 20 歳代末の、オハイオ大学で講師をし始めた頃です。（オハイオ州立刑務所に「入る」のは、もう少し後。）じつは先生が言及されているシアトルの全米アフリカ学会（ASA: African Studies Association）の年次大会には、黒人研究の会（現・黒人研究学会）からもうひとつパネルがありました。「アフリカについての日本人の見方と政治の関わり方の変容」というものでした。司会は会員でないアメリカ人のアフリカ史の先生が担当し、そこに黒人研の故・小林信次郎先生、北川勝彦先生、G・C・ムアンギ先生が参画するパネルでした。どちらのパネルも、当時は黒人研会員でもあったわたしの友人（故人）の歴史家・オハイオ大学のリチャード・ブラッドショー（専門はフランスの植民地支配期も含めた中央アフリカ共和国の歴史）が、学会当局と交渉し、その年の大会の目玉の一つとして招待的パネルとして企画されたものです。

そして、その学会には――実はわたしもいました。ただし、黒人研関連ではなく、上述のブラッドショーがアレンジした第二次大戦までの戦前期を主とした「日本とアフリカの交渉史」のパネルの一員でした。黒人研の二つのパネルとは別でした。

全米アフリカ学会は大きな学会で、ヒルトンやウェスティン・ホテルを借り切って、当時は前夜祭を入れると、4 日間で 2000 人くらい参加者がありました。学会割引きで高級な同じホテルに泊まっているので、わたしは時間を見つけて、亡き父の古川博已を含んだ黒人研のパネルを皆で準備している誰か？の部屋を、ウェスティンの長い廊下をてくてく歩いて訪問、父だけでなく、故・赤松光雄先生、風呂本惇子先生、加藤恒彦先生にも挨拶しました。黒人研の経験豊富な先生方でも、全米アフリカ学会のかなり派手で、人数も多く、アウェイ的な雰囲気に、少し緊張されている様子でした。風呂本先生からは、同学会で発表経験のあるわたしに、学会の様子などをたずねられました。なお、その部屋では一番若い加藤先生が、窓の外を眺めつつ、ひとり煙草をふかしながら一番余裕があるようでした。実際、パネルでも司会者として的外れな質問を、バッサリと見事に切られておられました。わたしは加藤先生とは世代や

分野が違うので、それまでほとんど黒人研例会後の懇親会での「カジュアル姿の呑んべい」（失礼！）の先生しか知らなかったので、その本気の闘うモードで、早口でまくしたてる迫力にびっくり！

わたしは当然、その黒人研のパネル「アフリカの独立とアメリカ黒人革命が日本における黒人研究に与えた影響」にも「アフリカについての日本人の見方と政治の関わり方の変容」にも顔を出しました。前者のパネルで、加藤（司会と発表者）・赤松・古川・風呂本と発表テーブルに並ぶ写真を撮ったのもわたし。ただ、その写真が国境を超える引っ越しが多く、今でてきません。そして、そのパネルで一番、フロアから質問を受けていたのが風呂本先生。質問は女性やジェンダー関連が多かったように思います。パネル終了後も聴衆に囲まれていて、議論の続きや名刺交換などをされていて、わたしが挨拶できないほどでした。わたしは学会後、すぐにオハイオ大学に戻らねばならないので、結局、先生方と食事や映画を一緒にすることはありませんでした。お会いしたのも、わたしが部屋を訪ねた短時間のときと黒人研パネルでの 2 回のみです。マルコム・Xの映画もオハイオで一人で観ました。オハイオでは拍手などはなかったですが、個人的には、後に刑務所で働いたときに大変役立ちました。マルコム・サンクスです。

ところで、風呂本先生が少しだけ言及されている前夜祭的パーティーでの表彰の話はそのとおりです。ただし、サプライズ的表彰に関しては誰の発案かなどは、結局、わたしにも不明なままです。その立食パーティーでは、在シアトル総領事館の日本人領事までが来て挨拶。後で、日本人で一番若い私を捕まえて日本語で、「こんなに黒人に囲まれたのは初めて」と、ばかげた発言をする外交官でした。その後、学会ではなく、シアトルを含む King 郡の King County Council からの “Special Recognition” の名目で、「日本と黒人／アフリカ系の人々との理解促進や交流につくした」として額入りでレターサイズ（A4くらい）の賞状が会員に手渡されました。なぜか、わたしの分までありました。

そして風呂本先生が書かれているように、その返礼に代表として古川博巳が、冒頭にジョークを交えた短いスピーチをしました。若いころ、フルブライトの前身の試験を自分の先生を飛び越して合格しながら、健康診断で結核で落とされ、海外には 50 歳まで行ったこともない、海外でのスピーチなどしたことのないはずの古川博巳のそのジョーク、わりと受けていました。結核と家庭の経済事情で大学にほとんど行くこともなく結局、中退、その後、高校の先生を一番長くしながら、日本にいて、日本の学界からは長年、「不可視」的な扱いを受け、ときにアメリカ大使館関係者から「黒人研究＝アカ活動」などと警戒もされ、ほとんど独学でアメリカ（一部、アフリカを含む）の黒人文学を切り拓いた学者の一人。サルトルではなく、それ以前のライトの作品に現代文学における実存主義の萌芽や広がりを早くに指摘した点などは、当時、アメリカでも紹介、評価されました。そんな、学術面では学問の公平性と客観性を武器に、努力と几帳面の人だったので、おそらくジョークの部分も、事前にホテルの部屋で入念に準備していたに違いないと思ってパーティー後に聞いたところ、会場に来てふと思いつたとか。（ふーん、やっぱりやるね、です。）

風呂本先生、こんな 30 年以上前の出来事を思い出させていただき、感謝申し上げます。これが「哲史サイド」の話（の一部）です。なお、この全米アフリカ学会のことは、赤松光雄先生が「アメリカ・アフリカ学会の年次大会に参加して」（11 月例会報告）として、『会報』第 36 号（1993 年 3 月 1 日刊）でも紹介されています。

追記：この拙稿を書いた後、関連写真を探し続けていたら、かなり古いパソコンの中からフィ

ルム写真をスキャンしたもの二枚が出てきました。個人的なフォルダーの中にあったので、おそらく黒人研では初公開かもしれません。黒人研の皆さんはアフリカおよびアフリカ系アメリカ、アフリカ系ディアスポラ世界をはじめ世界各地で活動されていますが、会としてのアメリカでの活動写真は貴重な記録かもしれません。

写真1：ASAオープニングセレモニーでの表彰（表彰状と会誌紹介）
（右から、加藤、古川、赤松、風呂本、1992 年 11 月 21 日）
※古川哲史撮影。写真の転載は固くお断り申し上げます。

写真2：ASAでの黒人研パネル「アフリカの独立とアメリカ黒人革命が日本における黒人研究に与えた影響」の発表風景
（右から、加藤、赤松、古川、風呂本、1992 年 11 月 23 日）
※古川哲史撮影。写真の転載は固くお断り申し上げます。

入会者

押野素子（おしのもとこ） 翻訳家 (2024 年 4 月より)

編集後記

前号に引き続き今回の96号も、様々な会員の方々にご助言・ご協力いただきました。まずはこの場を借りて、感謝申し上げます。

前号からスタートした『特別企画 70周年語り継ぎプロジェクト』、本号においても大変貴重なエッセイをご寄稿いただきました。ご執筆いただいた北島義信氏、楠瀬佳子氏、古川哲史氏には感謝申し上げます。このプロジェクトは、97号、98号、と続く予定ですので、ご寄稿くださる方、あるいはご候補の方に心当たりのある方はご一報いただけますと幸いです。また、今回の『会員からの投稿』欄は、院生の山田平氏にご執筆いただきました。ご寄稿いただいた山田氏にも感謝申し上げたく存じます。

随時会員のみなさまからの原稿を募集いたしております。学会発表や留学などされた際にはぜひ、またご意見などもありましたらぜひ河野までお寄せください。来年度も内容の豊かな会報になるよう、尽力してまいります。

（河野　世莉奈）

＜編集＞　黒人研究学会・編集部
〒839-8502　福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞　河野　世莉奈
serina.k529(a)gmail.com
ホーム・ページアドレス
https://kmmtshuji.wixsite.com/jbsa